

豊明市ひきこもり対策推進事業

社会福祉法人 豊明市社会福祉協議会

〒470-1116 愛知県豊明市新田町吉池 18-3 総合福祉会館内

助成事業の概要

目的：内閣府の全国調査や昨年起こった川崎市や練馬区の事件などにより、ひきこもりが社会問題として注目される中、ひきこもりという状態に対してその実情が正しく理解されていない世情がある。

ひきこもり数が100万人以上という現代において、ひきこもり状態は日本の一般的な親子関係の中で起こっている。ひきこもりに悩む親だけでなく子との関わりについて、子どもの自立を願う多くの親が考えてもらうことを目的として講演会を開催。

日時：令和2年12月6日（日）午後2時～午後4時

場所：豊明市総合福祉会館 大会議室

内容：学童期から50歳を過ぎた子をもつすべての親へ～安心できる家族関係へのプロセス～

講師：梶田智彦氏（SCS カウンセリング研究所副代表）の著書「親から始まるひきこもり回復」に基づき、ひきこもり状態と子どもの気持ちについて正しい理解が得られ、安心・安全な家庭環境を作るために親だからこそできるひきこもり回復までのプロセスについて講演

事業の成果

心理学と臨床経験の視点から「親が主体的に取り組む」ひきこもり回復『親育ち・親子本能療法』について梶田智彦氏を講師に招きご講演いただいた。親が取り組むという他にはない回復方法で、

コロナ禍であったが、予約開始前から問い合わせが入り、当日は定員30名のところ35名が参加された。

当窓口で相談していない方も10名程度見え、今後つながるきっかけを得ることができた。

アンケートによると、満足が24名、やや満足が6名、やや不満足が1名で不満足は0名であったことから、参加者の方々のニーズに応えられた結果となった。

本講演では、心理学的観点からアイデンティティの形成を「自分が自分でいい」という感覚と「あなたでいい」と社会から思われている確信によって作られていると説き、その形成の方法を具体的に説明している。ひきこもりの根本的な問題は「自分が自分でいい」と思えない、だからこそ「社会もそんな自分を受け入れないであろう」という思いである。このアイデンティティの拡散が「こうあるべき」という過剰なビリーフをつくりだし、何も踏み出せない結果となっている。この問題に関して、親は唯一子どもにとって絶対的な味方となりうる存在であり、その風土が子どもに安心と自信を与え、将来を考えるモチベーションを引き出すものであることを、わかりやすい例とともに説明している。

親の取り組みとして、無条件肯定を徹底すること、安心・安全な風土を作り、安心してひきこまれる環境をつくることである。ここで、マズローの欲求階層説を挙げ、一つ一つの欲求が満たされることにより、承認されたという感覚にまで親の力で導くことができるとしている。

ほとんどの親は社会から責められていると感じ

ているため、子どもに対して叱咤激励するか、何もしないかの 2 択を迫られていたが、そのまま子どもを愛してよいと断言したことにより、多くの参加者は安心したようである。

アンケート結果も、「自分の進むべき道がひらけた」「親のかかわりが重要であるとわかっていたが、どう関わるかがわかりやすかった」「本人の気持ちを受け止めていくことの大切さを再確認した」という感想がほとんどであった。

また、講演終了後も梶田氏に質問をと列ができる様子であった。さらに、今までご相談に訪れなかったご両親も、はばたきのチラシを皆持って帰られた。

■ 成果の広報・公表

講演会のチラシを作成し、町内回覧、市内中学校高等学校、ひきこもり関係団体等に配布。

また、市の広報と地域の生活情報誌（フリーペーパー）に案内を掲載。

講演会の周知とともに、ひきこもり相談窓口の周知も行うことができた。

当日参加できなかった家族については、資料をお渡しし、相談の中で活用していく。

■ 今後の展開

この度の講演は、コロナの影響もあり、予定よりも定員を減らして開催したが、35 名の参加者の中で 10 名もの新たな相談の兆しが見られた。

安心、安全な家庭環境へのアプローチは以前から行っていたが、やはり講演による講師の言葉はより大きな影響を与えるとともに、多くの参加者が同じような境遇にいるということを知ることができるといふ点で、親自身の安心につながった。

本人だけでなく、親の安心・安全がないと、親の取り組みは実現しない。これからも個別相談だけ

ではなく、大きな講演を開催することで、大っぴらにしてもいいのだ、負い目に思うことではないのだと展開していければと考える。

相談してみよう、誰かを頼ってみようと思える地域作り、また、家族支援に関する相談員のスキルアップも図っていきたい。